資料編

作成：美し山の草木舎

前田先生の本は、人間と植物の関係などで示唆深く、絶版になっていて、プレミアがついていますが是非ぜひ手許においていただきたい本のひとつです。前田先生は古代の染めを復元する研究者です。この本のとおりだと、大量の茜が必要になり、すぐ枯渇します。商業的工業的にもっとも効率よい茜染めの方法は別途開発する必要があるかもしれません。

「日本古代の色彩と染」　前田雨城　河出書房新社

p156

〈茜による染〉

日本古来の茜で、薬用に供されて重宝がられていたものである。日本の山野に自生種として多く生えており、採取も保存も簡単である。日本古来の茜は、染料として使用するときには多少の技術を要する。少しでも簡略化すると染め上がりが褐色になるが、規定通りに染付すると美しい緋色になる。次にその方法を示す。

イ）茜は夏から秋口にかけて、その根を採取し、陰干しにして保存する。

ロ）染料として使用する前日、まず根を太い細いにかかわらず一㎝ぐらいに切る。

ハ）冬場は五日間、夏場は三日間、籠などに入れて、流水に沈めておくこと。この際、日光の直射はさける。手頃な流水がない場合は、冬は十日間、夏は五日間、水に漬けて毎日水をとりかえること。非常に濃度のある黄茶の液が出るが、この液は流して棄てる。

二）焼物、鉄、銅などの釜の場合は、樫・栗・椎などの生の小枝を入れて煮沸し、二時間以上放置して、すべてを捨て去ること。生枝のないときは茶の葉でもよい。

ホ）新しい水に替えて再び煮沸する。水に晒した茜を入れる。この際、茜三kgに対して米１００ｇ、飯ならば大きい茶碗に一ぱいを液中に入れる。二時間煮沸をする。

へ）蓋をして一日放置のこと。アルミニウムの釜は、米が変化して酢になるので使用しない。

ト）翌日、再び約二時間の煮沸をする。その後、酢の臭がするまで（三日間）そのまま放置し、四日目に再び煮沸して後、中の茜をとり除いて染浴とする。三日目に酢の臭がしないときは、二日目の工程を繰り返してゆく。

チ）この中に布を入れて一時間ほど染める。染液が茶味になったら染料がなくなっているので、取り出して水洗い、乾燥する。水洗不十分の時は米酢の臭が残る。また染色中も乾燥中も、直接日光に当たらぬようにする。乾燥後は日光に非常に強くなっているのでその心配はない。

リ）布五〇〇ｇにつき、茜の乾燥根を濃色で十二kg、普通の緋で五kg用意すること。通常、三kgの染出液二回で一反の絹（六五〇g～七〇〇g）が緋おいえる色になる。

ヌ）茜はハ）の工程を充分にすると、色素は赤だけになり、真緋（あけ）になるが、歩止まりが悪く大量の茜草がいる（約二、五倍）。このハ）の工程では黄色が多少残るが、平安時代の緋色には染まる。

ル）以上がその染法であるが、一回染では大した濃度にはならない。しかし二回目は予想外に濃度がでるので注意が必要である。何かの原因で酢の臭いの少ない時は、食酢を追加すると結果がよい。米を忘れると、何日煮沸しても緋に染まる染液はできない。

p２２

染色の口伝

一．よい染色（そめいろ）は五行の内に有り。

本来の染色を得んとする者は、

五行の訓(おしえ)に従って、その業をすること。
五行の訓とは、
木(もく)、火(か)、土(ど)、金(ごん)、水(すい)、を言う。

木の章

草木は人間と同じく自然により創り出された生き物である。
染料になる草木は自分の生命を人間のために捧げ、
色彩となって人間を悪霊より守ってくれるのであるから、
愛をもって取扱うのは勿論のこと、
感謝と木霊(こだま)への祈りをもって、
染の業に専心すること。

火の章

火には誠せよ。誠なく火に接すれば、必ず害をうける。
火の霊(たま)は良き霊であるが、それに接する人の心によっては、
悪霊にもなる事を知れ。常に心して火の霊を祭ること。

土の章

土より凡て生れる。土悪ければ、
その地の草木悪し、草木悪ければ染色悪し。
大地に念じ良き土を選ぶべし。
総じて清気溢れたる土に生える草木をよしとする。

金の章

金気(鉄気・かなけ)は美しい色の大敵也。
金気(鉱物質ならん)なければ色彩固まらずと言えども、
金気にも善悪あるを知るべし。
霊(たま)に良き霊と悪しき霊のある如し。
一見して善しと見るは注意せよ。

水の章

一に水、二に水、三に根気、と言う。
一の水は量を表し、二の水は質を表す。まず大量の水を必要とし、
染色(そめいろ)に適するは、治まった水にして素直なる水であること。
素直なる水とは草木に生命を与え得る水の事也。
三の根気とは、仕事を与えられた喜び、その喜びに祈りの心を添えて
与えられた仕事に自己の力の凡てを、捧げることを言う。

前田雨城氏著『日本古代の色彩と染』より